



TITLE:

A・G・ホップウッドの記述的会計理論

AUTHOR(S):

高寺, 貞男

CITATION:

高寺, 貞男. A・G・ホップウッドの記述的会計理論. 経済論叢 1985, 136(3): 235-251

ISSUE DATE:

1985-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/134097>

RIGHT:

經濟論叢

第136卷 第3号

A・G・ホップウッドの記述的会計理論……………高 寺 貞 男 1

赤字国債の累積と金融・証券(下)……………西 村 貢 18

「三地域間産業協力」とソ連・東欧……………松 井 隆 幸 37

名誉教授インタビュー

岡部利良名誉教授に聞く…………… 67

経済学会記事

昭和60年9月

京都大學經濟學會

A・G・ホップウッドの記述的会計理論

高 寺 貞 男

会計の発展は組織の形成ならびに組織の実現と
可能化の歴史である。

——Hopwood, n. d., p. 8.

組織はその会計から独立していなかった。

——Hopwood, 1984 (d), p. 25.

組織は〔常に〕その会計に訴えて改革され〔か
つ拘束され〕ている。

——Hopwood, 1985, pp. 375-376.

I 会計理論にたいする文化的条件付け

「会計理論はわれわれの文化の真部分集合である」¹⁾といわれているように、
「会計理論と文化は容易に切り離すことができない」²⁾ほど、「相互に密接に
関係している」³⁾から、社会的価値体系として「社会を制御する変数〔である文
化〕が違えば、その分だけ会計理論は違ってくるであろう。」⁴⁾もし、このよう
な「会計理論にたいする完全な文化的条件付け(entire cultural conditioning)」
と呼ぶうる考えに賛同して、「会計理論はある集団の『文化』を反映するという
命題を受容したならば、当然の帰結として、社会〔文化〕の変化はある国の
会計理論の変化をもたらしたということになるであろう。」⁵⁾

1) Gambling, 1984, p. 124.

2) Gambling, 1974, p. 107.

3) Gambling, 1978, p. 163.

4) Gambling, 1974, p. 124.

5) Gambling, 1978, p. 46.

もちろん、ある社会の「文化の下位文化が個人の〔価値観または〕個性の合成として形成されているのと丁度同じように、ある社会の会計理論は集団力学によって変容された個人メンバーの合成的会計理論である。」⁶⁾したがって、「どんな社会でも、きわめて多様な個人的会計理論が共存することは避けられない。」⁷⁾しかし、ある社会または国の合成的会計理論がそれを条件付ける社会文化または国民文化の特有の構造を反映して、独特の類型を示すことは否定できないであろう⁸⁾。

たとえば、イギリスで「現在おこなわれている〔会計〕研究にたいする最初の刺激は大西洋を超えて〔アメリカから〕もたらされた」⁹⁾けれども、これら「いくつかの研究領域では、現在〔会計〕思想としてきわめて独特のイギリス学派 (quite distinctive British schools of thought) が存在している。」¹⁰⁾ 事実、1970年代「初め〔まで〕は、会計の行動的側面に関するアメリカの研究によって影響を受けたけれども、……アメリカの『行動的』関心は間もなくイギリスの『組織的』関心によって、それから、ますます、イギリスの『社会的』関心によって、取って代わられた。」¹¹⁾

その結果、「アメリカにおける〔会計〕研究が今でも〔会計情報にたいする個人と集団の反応を重視する〕心理学的〔新古典派経済学的〕見方を強調しているのに、イギリスの〔会計〕研究はますます〔組織論的・社会学的見方にそって〕より組織的・社会的レベルでの分析を進めている」¹²⁾のが現状である。

ところで、そこにいたる過程で、「会計研究を社会科学研究の主流へ統合し

6) Gambling, 1974, p. 124.

7) Gambling, 1974, p. 124.

8) たしかに、表面的には、文化的従属国の会計理論はしばしば文化的支配国の会計理論を範型として形成されてきた。しかし、伝統的に「記録された簿記に関する知識をもっていない社会も〔潜在的には、独自の民族文化にもとづいて形成された独特の〕『会計理論』をもっているかもしれない」(Gambling, 1974 p. 201.) ので、文化的従属国でさえ、会計理論にたいする民族文化的条件付けが不完全であるにせよ作用していたことを認めなくてはなるまい。

9) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xiii.

10) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 133.

11) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 149.

12) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xiii.

てゆく動き¹³⁾をリードしたのは、1976年に創刊された『会計・組織・社会』の編集長として、また、76年から社会科学研究審議会(SSRC)―84年に経済社会研究審議会(ESRC)と改名―の研究助成金を受けて組織されたいくつかの会計研究グループや研究集会の組織者として、「会計がこれまでにもち、かつ、これからももちうる社会的・組織的意味を理解する援けとなりうる会計の〔記述〕理論」を構築するために「理論的・方法論的革新」¹⁴⁾を試み、「これまで問題とされなかったことを問題にする」¹⁵⁾「イギリスにおけるより記述的なアプローチ」¹⁶⁾を推進した(1976年にオックスフォード経営研究センターの教授職フェロー¹⁷⁾に、78年にロンドン・ビジネス・スクールの会計学・財務報告論教授に、85年にLSEの国際会計・財務管理論教授に就任した)アントニー・G・ホップウッドであったといつてよいであろう。

ちなみに、このような新動向が展開する過程で、その先頭に立って、ホップウッドは、会計「情報を利用する社会的関係状況はそれに付される意味に影響を及ぼす」¹⁸⁾以上、「会計のどんな説明(Consequential accounting of accounting)もそれが出現した関係状況とそれに寄せられる多様な期待のより広範な認識にもとづいていなければならない」¹⁹⁾として、「会計がおこなわれる関係状況の中で会計を研究する」「代替研究パラダイムと方法論の必要性」²⁰⁾を強調している。

そこで、以下、本稿では、「会計の関係状況の多元的性格(the pluralistic nature of the accounting context)に関する認識の高まり」²¹⁾にそつて、ホ

13) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xv.

14) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 23.

15) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, pp. 22-23.

16) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xiii.

17) それ以前に、ホップウッドは1965年にLSEを卒業後、シカゴ大学経営学大学院に進み、67年に修士号、71年に博士号を取得して、70年にマンチェスター・ビジネス・スクールの講師に、73年にアドミニストレイティブ・スタッフ・カレッジのシニア・スタッフに就任していた。

18) Hopwood, 1979, p. 91.

19) Hopwood, 1984 (b), p. 12.

20) Hopwood, 1985, p. 370.

21) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xiv.

ップウッドが「より多元的關係状況 (a more pluralistic context) の中で」²²⁾ 会計を「狭い組織領域よりもむしろ社会領域に属す人工物」²³⁾ として観察し、分析してゆくために採用した会計研究方法論とその前提としてまたはそれを通じて形成した会計観を座標軸にして、『ホップウッドの記述的会計理論』をできるかぎり忠実に（彼がロンドン・ビジネス・スクールへ移ってから単独または研究協力者と共同で公表または半公表した多くの論稿から抜萃し）再構成してみよう。

II 会計の社会的認識と会計の社会史

徐々にではあるけれども、「会計はより多くの異成分から成る〔多元的〕現象 (a more heterogeneous phenomenon) と解されるようになってきた。」²⁴⁾ しかし、いざんとして、「一般におこなわれている論議においては、会計は非歴史的な、技術的に合理的な〔利害に左右されない〕現象として取り扱われている。」²⁵⁾ そこで、ホップウッドは「会計技法の利害に動かされる性格 (the interested nature) をはっきりと認識した研究のための一貫した知的基礎」²⁶⁾ として「会計を利害に動かされる活動と解す必要性」²⁷⁾ をつぎのように説明している。

「会計はその出現をもたらした社会的〔利害対立または〕闘争や革新から分離された現象と解されている」²⁸⁾ が、「会計はその出現、機能に加わる社会関係から切り離すことはできない」²⁹⁾ 以上、かかる社会的「関係状況を外して、会計の発展、現在の機能と効果、会計がこうむっている矛盾を理解できるかど

22) Hopwood and Bromwich, 1981, p. xiii.

23) Hopwood, n. d., p. 12.

24) Hopwood and Bromwich, 1984 (a), p. 8.

25) Hopwood, n. d., p. 9.

26) Hopwood, 1985, p. 368.

27) Hopwood, 1985, p. 367.

28) Hopwood, 1983, p. 290.

29) Hopwood, n. d., p. 10.

うか疑わしい」³⁰⁾ ので、「会計は〔社会グループ間の〕相異なる利害……が対立する領域に出現し、機能しているものと解される必要がある。」³¹⁾

「かかる〔会計〕観は公平かつ中立的な〔意思決定〕支援的な会計 (an impartial, neutral and merely facilitative account) という一般に受け入れられている見解と著しく相違している」³²⁾ けれども、最近では、「徐々に会計は有効な意思決定の中立的支援者の役割を果たす技術領域に属するものと解されるよりも、むしろ、きわめて特殊な経済的・社会的・政治的利害の追求に関係づけられるようになりだしている。」その結果、「会計は利害に動かされる努力 (an interested endeavour) とみなされるようになっていく。」³³⁾

そして、それと並行して、「会計はますます組織領域で演じられる社会的〔利害〕対立にその起源をもっていると解されるようになっていく」³⁴⁾ ばかりでなく、さらに、「会計が伝統的に役立ちえた利害以外の利害に役立ちうるかどうかを知りたいと思われだしている。」³⁵⁾

「このような見方からすれば、会計は特定の利害の表明 (the articulation of particular interests) を助けるばかりでなく、利害に動かされる努力の積極的な追求から出現した」³⁶⁾ といわなくてはならないが、「これまでおこなわれた歴史的研究の多くは、会計の現行の機能と変化の過程を理解する系統立った試みから離れて、〔会計〕技法の初期の歴史に集中していた」³⁷⁾ ので、会計が出現し、機能し、かつ変化する「社会的・経済的・制度的関係状況から切り離して、会計の技術史が書かれる傾向が存在した。」³⁸⁾ そして、その反面で、「いかに会計は〔出現し、機能し、かつ〕変化するかを説明する〔会計の社会史

30) Hopwood, 1984 (b), p. 12.

31) Hopwood, 1984 (b), p. 7.

32) Hopwood, n. d., p. 2.

33) Hopwood, n. d., p. 1.

34) Hopwood, n. d., p. 11.

35) Hopwood and Bromwich, 1984 (a), p. 11.

36) Hopwood, 1985, p. 367.

37) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 140.

38) Hopwood, 1985, p. 365.

の]研究が本当に不足している」³⁹⁾ので、「会計の発展と変化のより広汎な社会的関係状況については、ほんのわずかしかわかっていないのである。」⁴⁰⁾

その意味で、「われわれは会計の変化のいかなる一般理論も提示し、または「会計の変化の正確なからくりを」発見していない」⁴¹⁾といえよう。

III 社会的要因と組織的要因の交わりとして創出

され、機能している会計

もちろん、「相対的に少数である」けれども、「会計の変化と新しい会計の出現の社会的分析」⁴²⁾が試みられた場合には、「会計はそれが出現した関係状況に依存する環境適合的現象 (a contingent phenomenon) と一般に認められるようになった。⁴³⁾しかし、「このような会計の変化の環境適合的見方」⁴⁴⁾は「会計とその環境の弁証法」⁴⁵⁾または「会計と社会の相互依存性」⁴⁶⁾を捕えることができないので、ホップウッドは「会計がおこなわれる関係状況にたいする会計の関係」⁴⁷⁾について、つぎのように説明している。

あらためて指摘するまでもなく、「環境は発展、進化するにつれて、会計に異なった必要を満たすことを要求する」ので、それに応えざるをえない「会計は〔一般に〕環境適応現象 (a reflective phenomenon) であり、かつそうあるべきものと解されている。」⁴⁸⁾そのため、「われわれがいだいている会計の変化モデルはなお多くの点で環境適合モデル (a contingent model) にとどまっている。」⁴⁹⁾

39) Burchell, Clubb and Hopwood, 1981, p. 100.

40) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 22.

41) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 46.

42) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 23.

43) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 140.

44) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 5.

45) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 8.

46) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 9.

47) Hopwood, 1983, p. 298.

48) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 4.

49) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 46.

しかし、「会計はそれがおこなわれる関係状況に単に適応するよりも、むしろ、その関係状況に影響する力をもっている」⁵⁰⁾ から、「会計は単なる環境適応的努力というよりも、むしろ、環境形成的努力 (a creative than merely reflective endeavour) である」⁵¹⁾ と認識しなくてはなるまい。

そこまで踏み込まなくても、「いかに会計はその関係状況によって形成されたか、さらに、いかに前述の関係状況の少なくともいくつかの側面は会計そのものによって逆に形成されるかを認識することによって、会計技法〔と環境〕の相互作用性に注意を向け」たならば、われわれは「会計を〔環境に〕依存し、かつ〔環境から〕独立した現象 (a dependent and independent phenomenon) と解することができる」⁵²⁾ であろう。

いずれにしても、「会計の環境適応的役割と環境形成的役割の間には、込み入った相互作用がある」⁵³⁾ ことは否定できないので、今日では、「会計は〔組織と〕社会に適応し、かつ〔組織と〕社会の形成を可能にするものと解されるようになった。」⁵⁴⁾ すなわち、一方では、「会計はますますそれが機能している特定の組織とより広い社会機構の双方の影響にさらされる現象と解されるようになった」⁵⁵⁾ が、他方では、「会計はそれが……利用される関係状況を支援するよりも、むしろ、関係状況を形成し、かつ積極的に動員することに関与する、利害に動かされる実務の性質をもったものと解されうる」⁵⁶⁾ ようになった。

こうして、会計の「環境適応能力」と「環境形成能力」とが織りなす「会計の変化過程の一見不確かな二元的特性 (dualistic character)」⁵⁷⁾ が認識されると、「いかに社会的要因が過去と現在の会計に織り込まれてきたか。どんな〔社会的・組織的〕要因が会計の変化の強力な動員者であったか。どんな役割

50) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, pp. 7-8.

51) Hopwood, n. d., p. 1.

52) Hopwood, 1983, p. 288.

53) Hopwood, 1983, p. 301.

54) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 21.

55) Hopwood, 1983, p. 301.

56) Hopwood 1984 (b), p. 11.

57) Burchell, Clubb and Hopwood, forthcoming, p. 8.

を会計は社会・政治領域の形成と実現において演じたか」⁵⁸⁾ が問われることになるであろう。

もちろん、これらの問いに答えるためには、「社会的要因は組織的要因から切り離せない。……事実、少なくとも部分的には、社会的要因は組織の中にあらわれているし、逆に、組織的要因は社会の重要な部分を構成している。」⁵⁹⁾ したがって、「社会的要因と組織的要因が相互に会計に織り込まれる仕方に考察が向けられなくてはならない」⁶⁰⁾ が、不幸なことには、これまで、「いかに会計は社会的問題関心を組織に突きさし〔はめ込むことを通じ〕て、組織を変えることができるか、逆に、社会の形成に影響しうる組織実務を生みだすことができるかを評価する試みはほとんどなされてこなかった。」⁶¹⁾

そこで、ホップウッドは、これらの問題に光を当てるために、組織「社会現象として会計を認識する必要性」⁶²⁾ をつぎのように説明している。

これまで、「組織領域と社会領域は独立した領域にとどまる傾向をもっていた」⁶³⁾ が、そうした関係状況の中で、「会計は社会的要因を組織に〔突きさし〕はめ込むのに重要な役割を演じてきた」⁶⁴⁾ し、また、逆に「会計は組織が社会領域へ組み込まれる重要な手段のひとつ〔であった〕と考えられる。」⁶⁵⁾ そうすると、「会計は純粋な組織現象と考えることはできない。」⁶⁶⁾ 現在では、組織内部の「管理会計でさえ、組織・社会現象であると理解されるようになっている。」⁶⁷⁾

事実、「会計は組織的要因と社会的要因の交わりとして創出され、その後も

58) Hopwood, 1985, p. 366.

59) Hopwood, 1983, p. 302.

60) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 23.

61) Hopwood, 1984 (b), p. 13.

62) Hopwood, 1985, p. 366.

63) Hopwood, 1984 (b), p. 13.

64) Hopwood, 1983, p. 302.

65) Hopwood, 1984 (b), p. 12.

66) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 19.

67) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 150.

そうしたものとしてしばしば機能している」⁶⁸⁾ ので、「会計は組織を背景にして機能しているけれども」⁶⁹⁾、「その起源は組織の内部と外部の双方における社会権力の行使にあると解されている。」⁷⁰⁾

IV 会計は本質的には社会的・政治的活動である

周知のように、「会計の出現をうながす〔社会的・組織的レヴェルでの〕圧力はおびただしく、かつ相反することもある」⁷¹⁾ ので、「いかに組織の会計が……〔組織の内部と外部の〕政治過程から出現したかを研究する多くの可能性」⁷²⁾ が考えられる。さらに、会計はひとたび実施されると、「会計の社会的・政治的性格」⁷³⁾ はよりあらわとなるので、「会計が組織生活と社会生活の特徴づける政治過程で演じる役割に考察が向けられなくてはならない。」⁷⁴⁾

そこで、「正しく理解された会計は基本的には社会的・政治的活動である」⁷⁵⁾ と信じるホップウッドは、会計が「社会的・政治的動員の有力かつ重要な手段」⁷⁶⁾ のひとつとして機能しうることをつぎのように説明している。

「会計は組織境界の特定化、組織空間の内部分割……〔以外に、組織を〕目に見えるようにする手段 (a means of visibility) の創出に関わりあっている」⁷⁷⁾ が、「過去と……未来の不確実な世界から〔決定論的な〕『事実』を〔観念の体系として〕創出する」⁷⁸⁾ に当って、「会計は等しく意味のある潜在的行動や問題関心の全系列〔の公平な受け入れ〕を排除し、かつ追放する」ので、

68) Hopwood, 1984 (b), p. 12.

69) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 150.

70) Hopwood, n. d., p. 11.

71) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 22.

72) Hopwood, 1983, p. 297.

73) Hopwood, 1985, p. 363.

74) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 23.

75) Hopwood, 1985, p. 365.

76) Hopwood, 1985, p. 376.

77) Hopwood, n. d., p. 1.

78) Hopwood, 1984 (a), p. 180.

「ある〔特定の〕現象，問題関心，活動のみが会計領域へ参入する。」⁷⁹⁾

したがって、「会計そのものは選択的かつ不公平なものである (being selective and partial) と認められだしている」⁸⁰⁾ が、いずれにしても、「会計は〔意図的に〕目に見える世界 (the realm of the visible) を形成することによって、現行の組織生活と望ましいと考えられる〔その〕変化の方向に付与される意味に重大な影響を及ぼすことができる。」⁸¹⁾

より詳しく述べると、「会計が〔その特性を生かして〕組織行動とその結果に与える選択的〔かつ不公平〕な可視性 (the selective visibility) は、それまで不確かではあるが、実行可能にして、望ましく、かつ重要であると解されてきたことに影響を及ぼす重大な役割を演じることができる。」⁸²⁾

さらに、これまでとは違った「組織の代替可視性 (alternative visibilities) の創出」は、違った組織局面の強調、違った価値観または問題関心の意思決定過程への挿入、違った組織行動にたいする正統性のアピールなど⁸³⁾を通じて、これまでとは違った「パターンの組織内外の権力と影響力を形成することができる。」⁸⁴⁾ したがって、会計は「影響力のある不公平なパターンの可視性 (a partial but influential pattern of visibility) を創出」⁸⁵⁾「独占化すること」⁸⁶⁾によって、組織内外の「政治領域にきわめて大きな結果をもたらすことができる」ばかりでなく、さらに、そこに狙いをつけて、「政治的主張や論議を動員するために利用することができるのである。」⁸⁷⁾

ところで、会計の「政治的結果と経済的結果」⁸⁸⁾のうち、前者の経験的研究

79) Hopwood, n. d., p. 1.

80) Hopwood, n. d., p. 1.

81) Hopwood, 1984 (a), p. 179.

82) Hopwood, 1984 (a), p. 178.

83) Hopwood, 1984 (a), p. 179.

84) Hopwood, 1984 (a), pp. 177-178.

85) Hopwood, 1983, p. 299.

86) Hopwood, n. d., p. 20.

87) Hopwood, 1984 (a), p. 181.

88) Hopwood, 1984 (c), p. 29.

はかなり困難であるけれども、後者の経験的研究は比較的容易であるので、すでに、「潜在的には同じ組織でさえ、異なったパターンの内部可視性が与えられると、長い間には非常に異なったパターンの業績が生じることが〔経験的研究の成果として〕示されてきた。」⁸⁹⁾ その結果、現在では、「特定のパターンの組織可視性の創出」⁹⁰⁾ に参画する「会計は、不確かではあるが、望ましく、かつ実行可能なことに関する異なった見方の形成にはっきりと結びつけられるようになっている。」⁹¹⁾

以上考察してきたように、会計によって組織に与えられる「新しい経済的可視性は、それまで無視されてきたことを強調し、それまで当然と思われてきたことに挑戦するために作り上げられている。」⁹²⁾ が、その場合に、会計は「技術的専門知識が政治的論議を支配することができる領域の創出」⁹³⁾ と独占化を通じて、「それまで政治的優先問題と解されてきたこと」を「技術的事実と必要が支配する新興領域」へ引き込み、「政治的正統性の犠牲においてえられる技術的正統性の強化」⁹⁴⁾ に貢献してきたことを「会計の社会・政治史の理解」⁹⁵⁾ に付け加えなくてはなるまい。

いずれにしても、「会計は組織〔行動〕の正統性を強化する直接的基礎を用意することができる」⁹⁶⁾ ので、「組織はその〔内部・外部〕環境からの圧力に応えるために〔対内的〕対外的正統性という名目で特定の会計……実務を利用することができる」⁹⁷⁾ けれども、会計の「結果はそれがおこなわれる特殊な関係状況の中で生み出され、……その利用、その組織的・社会的役割、他の組織的・社会的過程や慣行と交わる仕方、その利用が生み出す抵抗によって決定さ

89) Hopwood, 1979, p. 90.

90) Burchell, Clubb, Hopwood, Hughes and Nahapiet, p. 5.

91) Hopwood, 1984 (a), p. 171.

92) Hopwood, 1984 (a), p. 171.

93) Hopwood, 1984 (a), p. 180.

94) Hopwood, 1984 (a), pp. 180-181.

95) Hopwood, 1985, p. 366.

96) Hopwood, 1984 (a), p. 182.

97) Hopwood, 1983, p. 302.

れる」ので、「それが取り入れられ、変化させられる〔当初の〕狙いとは必ずしも密接な自動的關係をもっていない。」⁹⁸⁾ したがって、「組織の行動と成果の会計は、〔たとえば、組織行動の正統性や組織内外の権力分布の変更という〕実質の問題関心を織り込んだ時でさえ、必ずしも自動的効果をあげられない」⁹⁹⁾ わけであるから、「期待せる結果に加えて期待せざる結果となる可能性」¹⁰⁰⁾ をもっているといわざるをえない。

V 通用の会計から代替会計へ、さらに非会計へ

以上、ホップウッドが試みた多元的關係状況の中での会計の観察と「分析」について整理してみたが、そこ「から浮び出た〔これまでのややステレオタイプ化した会計観とは〕対照的な代替〔会計〕観」¹⁰¹⁾ にしたがえば、「会計はそうでないもの (what it is not) によって評価できる」¹⁰²⁾ ばかりでなく、さらに、「変化しつつある現象としての」¹⁰³⁾ 「会計はそうでなかったもの (what it was not) になる過程にあるものとして研究することができる。」¹⁰⁴⁾

たしかに、そうした方向での会計研究または「会計論議そのものは会計がそうでなかったものになるはずみを与えることができる」¹⁰⁵⁾ ので、「あるパターンの『反会計』 (counter-accountings) が労働運動の観点から一般におこなわれている会計の基礎と含意に挑戦するために出現し」、すでに「学界の壁の外側にしっかりと定着した。」¹⁰⁶⁾ しかるに、学界の内部では、一般におこなわれている会計に対抗する「代替会計という考え (alternative-conceptions of accounting) は、たとえあったとしても、ほとんど明示されてこなかったし、現

98) Hopwood, 1984 (a), p. 185.

99) Hopwood, 1984 (a), p. 184.

100) Hopwood and Bromwich, 1984 (a), p. 7.

101) Hopwood, 1984 (c), p. 7.

102) Hopwood, 1984 (d), p. 6.

103) Hopwood, 1983, p. 296.

104) Hopwood, 1984 (d), p. 32.

105) Hopwood, n. d., p. 18.

106) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 153.

在でもそうである。〔そして〕会計はこれまでどおりに会計である」¹⁰⁷⁾ という状態が続いている。

そこで、ホップウッドは現行「制度への従属」¹⁰⁸⁾ (the institutional allegiance) から「会計研究と会計研究者」を解放するために、「代替会計とそれを受け入れる場所である代替〔社会〕制度 (alternative accounts and alternative institutional loci) という考え」¹⁰⁹⁾ を打ち出して、「代替会計の形態とありうる会計 (alternative forms of accounting and accounting as it might be) の研究の必要性」¹¹⁰⁾ をつぎのように主張している。

「会計は会計に対抗しうる」¹¹¹⁾ (Accountings can counter accountings) し、「また、会計はそれ自身にたいする重大な影響力として働きうる」¹¹²⁾ から、「現在組織と共存している〔会計〕情報処理〔システム〕のより広汎な代替・補足形態 (the wider, alternative and complementary forms) が……論議されはじめねばならない。」¹¹³⁾

なお、「会計は〔会計研究者の〕注意を独占する傾向が存在した」¹¹⁴⁾ ので、ホップウッドは「会計そのものへの……従属」¹¹⁵⁾ (the allegiance.....to accounting itself) から会計研究者を解放するために、「単にこれまでとは異なった〔代替〕会計よりもむしろほとんど会計でないもの」¹¹⁶⁾ (fewer accounting than merely different one) または「会計らしくないもの」¹¹⁷⁾ (the non-accounting) として「会計にたいする社会的・制度的代替過程」(alternative social and institutional processes to accounting) という考えを打ちだして、

107) Hopwood, 1984 (b), p. 5.

108) Hopwood, 1985, p. 373.

109) Hopwood, 1985, p. 373.

110) Hopwood, 1980, p. 158.

111) Hopwood, 1984 (a), p. 184.

112) Hopwood, n. d., p. 17.

113) Earl and Hopwood, p. 11.

114) Hopwood, 1985, p. 374.

115) Hopwood, 1985, p. 373.

116) Hopwood, 1985, p. 374.

117) Hopwood, 1984 (d), p. 32.

会計「情報への^{アクセス}接近権の授与」などを「会計にたいする特殊な代替過程 (specific alternatives to accounting) の可能性」¹¹⁸⁾ の例として挙げている。

たしかに、会計「情報への接近は情報の開示に実質的に含まれている計画に反応するよりも、むしろ、予想し、かつ計画する機会を労働〔の側〕に与えるに違いない」¹¹⁹⁾ から、これまでに、会計「情報の報告よりもむしろそれへの接近の可能性がさらに進んで考察するに値するトピックといわれてきた。」¹²⁰⁾ しかし、その後「時の経過にもかかわらず、会計にたいする代替過程は〔いうまでもなく、代替会計でさえ〕いぜんとして将来の研究課題として残されている」¹²¹⁾ 始末である。

いや、そればかりではない。「会計によって採用される形態にたいするより広汎な文化的影響を検討することに〔1970年〕初めから問題関心が表明されてきた」¹²²⁾ にもかかわらず、「文化の不可欠の構成部分としての『会計』」¹²³⁾ が「いかに国民文化と伝統にかかわり合っているかは未知のままに残されている。同じように、〔国民文化と伝統に逆に影響しかねない会計の〕意味も研究されていない。」¹²⁴⁾ 特に、「異なった国民〔文化と〕伝統」という国際的關係状況の中での会計の「国際比較」は「これまでほとんど無視されてきた領域である。」¹²⁵⁾

さて、これまで問題としてきた「領域におけるイギリスの〔会計〕研究」に共通してみられる「経験的〔研究〕の相対的無視は、一方では、〔その理論的開放性と他の関連分野における新発展への配慮によって、新古典派経済学的見方よりもむしろ〕他の人間科学や社会科学から新しい理論的見方の利用を容易にした」し、「また、理論的問題関心への集中は、会計実務のより広汎な組織

118) Hopwood, 1985, p. 374.

119) Cooper, p. 129.

120) Hopwood, 1985, p. 374.

121) Hopwood, 1985, p. 375.

122) Hopwood, 1983, p. 300.

123) Gambling, 1978, p. vii.

124) Hopwood and Bromwich, 1984 (a), p. 10.

125) Hopwood and Bromwich, 1984 (a), p. 10.

的・社会的性格の探究を推進した。」¹²⁶⁾ しかしながら、「会計行動についてはほとんど経験的にわかっていない」ために、そこに形成された会計「理論の多くは正確な経験的裏付けをほとんどもっていない」¹²⁷⁾ のが現状である。

とはいえ、ホップウッドが提示した「新しい〔記述的会計〕理論を〔広く〕伝達〔受け入れさせて、それを経験的に裏付け〕することが〔現在〕できないということは、長期の問題ではない」¹²⁸⁾ から、やがて解決されると期待してよいであろう。

《引用文献》

- Michael Bromwich and Anthony G. Hopwood, "Introduction: Issues Facing Auditing Research in the UK," in Anthony G. Hopwood, Michael Bromwich and Jack Shaw (eds.), *Auditing Research: Issues and Opportunities*, Pitman, 1982.
- Stuart Burchell, Colin Clubb and Anthony Hopwood, "A Message from Mars—and other Reminiscences from the Past," *Accountancy*, Vol. 92, No. 1058, October 1981.
- Stuart Burchell, Colin Clubb and Anthony Hopwood, "Accounting in its Social Context: Towards A History of Value Added in the United Kingdom," *Accounting, Organizations and Society*, forthcoming.
- Stuart Burchell, Colin Clubb, Anthony Hopwood, John Hughes and Janine Nahapiet, "The Roles of Accounting in Organizations and Society," *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 5, No. 1, 1980.
- David Cooper, "Information for Labour," in Bryan Carsberg and Tony Hope (eds.), *Current Issues in Accounting*, 2nd ed., Philip Allan, 1984.
- Michael J. Earl and Anthony G. Hopwood, "From Management Information to Information Management," in H. C. Lucas, Jr., F. F. Land, T. J. Lincoln and K. Supper (eds.), *The Information Systems Environment*, North-Holland, 1980.
- Trevor [E.] Gambling, *Societal Accounting*, George Allen and Unwin, 1974.

126) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 150.

127) Hopwood and Bromwich, 1984 (b), p. 151.

128) Bromwich and Hopwood, p. 12.

Trevor Gambling, *Beyond the Conventions of Accounting*, Macmillan, 1978.

Trevor Gambling, *Positive Accounting: Problems and Solutions*, Macmillan, 1984.

Anthony Hopwood, "Criteria of Corporate Effectiveness," [in Morris Brodie and Roger Bennett (eds.), *Perspectives on Managerial Effectiveness*, Thames Valley Regional Management Centre, 1979.

Anthony G. Hopwood, "Discussion of 'Some Inner Contradictions in Management Information Systems' and 'Behavioral Implications of Planning and Control Systems'," in H. Peter Holzer (ed.), *Management Accounting 1980*, Department of Accountancy, University of Illinois at Urbana Champaign, 1980.

Anthony G. Hopwood, "On Trying to Study Accounting in the Contexts in Which it Operates," *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 8, No. 2/3, 1983.

Anthony Hopwood, "Accounting and Pursuit of Efficiency," in Anthony Hopwood and Cyril Tomkins (eds.), *Issues in Public Sector Accounting*, Philip Allan, 1984 (a).

Anthony G. Hopwood, "The Development of 'Worrying' about Management Accounting," A Paper presented to the Harvard Business School 75th Anniversary Colloquium on Productivity and Technology, 1984 (b).

Anthony G. Hopwood, "Accounting Research and Accounting Practice: The Ambiguous Relationship between the Two," A Paper presented to the Conference on New Challenges for Management Research, Leuven, Belgium, May 23-25, 1984 (c).

Anthony G. Hopwood, "Archaeology of Accounting Systems," A Paper presented to the Conference on the Roles of Accounting in Organizations and Society, Graduate School of Business, University of Wisconsin, July 12-14, 1984 (d).

Anthony G. Hopwood, "Accounting and the Pursuit of Social Interests," London Business School, no date (1985?).

Anthony G. Hopwood, "The Tale of a Committee That never Reported: Disagreements on Intertwining Accounting with the Social," *Accounting, Organizations and Society*, Vol. 10, No. 3, 1985.

Anthony Hopwood and Michael Bromwich, "Introduction," in Michael Bromwich

and Anthony Hopwood (eds.), *Essays in British Accounting Research*, Pitman, 1981.

Anthony G. Hopwood and Michael Bromwich, "Emerging Patterns of Management Accounting Research," in Robert W. Scapens, David T. Otley and Roger J. Lister, *Management Accounting, Organizational Theory and Capital Budgeting*, Macmillan, 1984 (a).

Anthony G. Hopwood and Michael Bromwich, "Accounting Research in the United Kingdom," in Anthony G. Hopwood and Hein Schreuder (eds.), *European Contributions to Accounting Research: The Achievements of the Last Decade*, Free University Press, 1984 (b).

Anthony G. Hopwood, Stuart Burchell and Colin Clubb, "The Development of Accounting in its International Context: Past Concerns and Emergent Issues," in Alfred Roberts (ed.), *A Historical and Contemporary Review of the Development of International Accounting*, Georgia State University, 1980.

(追記)

来年4月には、1976年に再版された『会計と人間行動』(1974年)以来10年ぶりに、つぎのようなホッブウッドの3冊目の単独著書が出版される予定である。

Anthony G. Hopwood, *Social Accounting and Social Significance of Accounts*, Basil Blackwell.